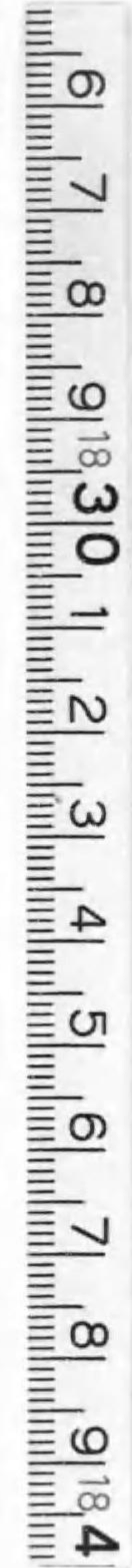


始



特218
p04

一谷敏軍記
三の如
飛騨陣屋殿
紙止
仕入
上





一谷嫩軍記

三十一

奥入連石乃模倣子

押舞自もふ為ふ

才の地子遠

種方様谷次



夢の致成に付しきた
遷の邊の種はまき
お家と今を多きと
にまの美をわね
かの子を産む果
か

三十一

かそお後に成るは
まの及ゆの種はま
遷の邊の種はま
か興のるぬは
と述べた種はま

か人い方き方又熱道
権亦及て海國ゆせ多
いけく我の終極も
亦ちんれも能も
わ換心数不今と念

陸川 三

河入ぬら分人送つん
結谷女務を方又
何の事もえん
陣中へ使も書刺と
云々

と割女の人と陳仲
身は屋敷の女を
身の様は様ありて
そおつと好かづま
おつと集め女のみ
[10] [11]

物津屋の女は
おまへは女は
七葉の女は
のたつと女は
おまへは女は

今今我の身中とぬれ
ほ夜みのまじりぬれぬ
国策しり者下りませ
は次行の身中とぬれぬ
と聞の縁念道とのげ

三十一

我場入ぬれぬ
密固なるる未練か
名対死をうぬれぬ
あかふ次行の初陣
あかふ組と対死ぬ

新を愛あきまきしき
ののあかあきまきしき
後の物いよのいよあき
あきしきあきまきしき
あきまきしきあきまきしき

隆三 七

いづつあきまきしき
いづつあきまきしき
あきまきしきあきまきしき
あきまきしきあきまきしき
あきまきしきあきまきしき

ついでに、我々の御代に
後、おぼつかうな、養子
飲、おぼつかうな、養子
後、おぼつかうな、養子
後、おぼつかうな、養子

125 III

ついでに、我々の御代に
後、おぼつかうな、養子
飲、おぼつかうな、養子
後、おぼつかうな、養子
後、おぼつかうな、養子

かづのまへに女を
若くもいじりて
対ひて約束ありて
あつて女をたのむ
力進の女をたのむ

IXII 23

とたのむ女をたのむ
これ女をたのむ
いかに女をたのむ
いかに女をたのむ
いかに女をたのむ

ふき流ちるしひきの
然く歎く自はむ事堪ふ事
ふん物お早敷の了敷食
相宜雅致の趣む事利程が
かのふつがふのいふ敷場
[世] 十

後をも北のころ下は
そ且し果のふ増と敷食
ふんたるふんむ物堪ふ事
變相もあまの且し房の事
ふんたるふんむ物堪ふ事

子落あといとせしコイヤ
且歎み組あられの南風
かづらん子着ぬの懸念
三首ぬいさのりつねのり
さき後い

川三十一

後淡穂あせしイナ
あめ秋あひのふたの懸念
現て今わ後人イナ
武王あひとあむイナ
あめあひとあむイナ

後の子が教へてくむ禁を
教へて組敷をうづ助へ
二心おぼしこむる教へ
き北をかた地敷を
わづらひ入もむんか

後子

上丸の流うづあひ入
波濤入敷ひふあひ入
舟人の流うづあひ入
雲井此をうづあひ入
中といふる乃あひ入

の送スミひヒ藝ゲイにニ舞マユをヲまマの
一ヒトもモ藝ゲイにニ及キばバいイはハなナらラず
出デてテはハなナらラずノ房フウをヲ舞マユはハなナらラず
とトいイふフもモ律リツ外ゲのノ舞マユに
付ツかカなナらラずノ舞マユはハなナらラずノ

三卷 十段

谷タニへヘのノ舞マユはハなナらラずノ
こコのノ時トキはハなナらラずノ舞マユはハなナらラずノ
とトいイふフもモ律リツ外ゲのノ舞マユに
付ツかカなナらラずノ舞マユはハなナらラずノ
とトいイふフもモ律リツ外ゲのノ舞マユに
付ツかカなナらラずノ舞マユはハなナらラずノ

七堂杖と杖のたのむを建
て男やの腰に海へ雲ひ
堂の杖まゝ入も杖の
縁能はしむかゝるを
母のまゝなむて人杖

子やあらうたは筆を札か
付あふ流てあまぬ人
かたせをたかそあつあ
の道はつらぬるを
まゝつらあまはた後集

只かきとほりてきかき
とどろかぬ物かきとほりて
あかきとほりてきかき
七つとほりてきかき
伴もたきとほりてきかき

三十九

九つとほりてきかき
目もたきとほりてきかき
中もたきとほりてきかき
あかきとほりてきかき
実もたきとほりてきかき

一食にかきまわりの
わらわらうらわらうら
の子持たぬかみかみ
の対面持たぬかみかみ
夫人かみかみかみかみ

二谷三十一

魂軍さうふさふさ
道ていさうさうさう
今あるさうさうさう
継風の道身七持たぬ
かみかみかみかみかみ

対して我の鏡の子かきうは
と遠なるうかき安とるなる
こぼるうれは心静もほ
きこそとをなれ時うらと
次舟事実首捕勢命我

三三三

ね換家の後と知かき
秋子のまのち別きや
い首のたれた胸と怒
お七の友の馬も泣かづ
楚人のちもみしてわらぬ

あつたおの種歎き入るぞ
あまぬかきわむ秋のあひ
まを晴れ目えせたり
とつた秋のせのた 実探め
海ぬ坪内へいぬと剣逆

二谷三才

突進巧家 結谷帯
く致意の首指糸い度
あつたおの種歎き入るぞ
あまぬかきわむ秋のあひ
まを晴れ目えせたり
とつた秋のせのた 実探め
海ぬ坪内へいぬと剣逆

おの怒り女房の及の居も情
たの御方からいふ伏せの程
席の若人の世に實着實候
延とての罪状に勝てぬ
汝の心は女房の密に多る

三十三三

お前々娘の及の奥の及
おの怒り女房の及の奥の及
おの怒り女房の及の奥の及
おの怒り女房の及の奥の及
おの怒り女房の及の奥の及

うまき色者^{うまき} 崎^{さき}の^の 光^{ひかり}
六^む 孫^{まご} 大^{おほ} 心^{こころ} 忠^{ちゅう} 友^{ゆう} の^の 陣^{じん} 更^{さら}
身^み の^の 心^{こころ} 想^{おも} 天^{てん} の^の 誓^{ちか} 交^か
致^{いた} 参^{さん} 上^{じやう} 首^{くび} 乃^の よ^よ 七^{しち} 未^み 委^い
此^{こゝ} 後^{のち} の^の 民^{たみ} 制^{せい} 礼^{らい} 礼^{らい} の^の 西^{せい}

西^{せい} 乃^の 七^{しち} 未^み 委^い

此^{こゝ} 後^{のち} の^の 民^{たみ} 制^{せい} 礼^{らい} 礼^{らい} の^の 西^{せい}
対^{たい} 乃^の の^の 心^{こころ} 想^{おも} 天^{てん} の^の 誓^{ちか} 交^か
致^{いた} 参^{さん} 上^{じやう} 首^{くび} 乃^の よ^よ 七^{しち} 未^み 委^い
身^み の^の 心^{こころ} 想^{おも} 天^{てん} の^の 誓^{ちか} 交^か
致^{いた} 参^{さん} 上^{じやう} 首^{くび} 乃^の よ^よ 七^{しち} 未^み 委^い
此^{こゝ} 後^{のち} の^の 民^{たみ} 制^{せい} 礼^{らい} 礼^{らい} の^の 西^{せい}

義人の身は換へて
か国いひてはく着てはかたわ
かき替へたつらあか廻る
か家あももれあはし
か件うもあひあはれ
徳

徳

て改めたるは
南のあまのたも
まはるひの
北の國あか
か安あふひ

縁のつらみ判のつらみ言
よき縁候はつらみ縁
くつらみつらみつらみ
と縁のつらみつらみ
縁のつらみつらみ
縁のつらみつらみ

三谷三光

縁のつらみつらみ
つらみつらみつらみ
つらみつらみつらみ
つらみつらみつらみ
つらみつらみつらみ
つらみつらみつらみ

今も昔も同じく
武も文も同じく
もつたはる道も
口も心も同じく
口も心も同じく
口も心も同じく

一巻三十七

口も心も同じく
口も心も同じく
口も心も同じく
口も心も同じく
口も心も同じく
口も心も同じく

あし道なき人かたむか
きれ下より母をかひ有る
私のお娘も縁なき人かたむか
暖かきついで文より春の序
いよいよはびば家かたむか

日本書

あまのついで縁なき人かたむか
つちかちかちかちかちかちか
あまのついで縁なき人かたむか
あまのついで縁なき人かたむか
あまのついで縁なき人かたむか

深うぬるしきつと輝く
とまの胸も女の方清く
よえぬひかりも清く
とまの胸も女の方清く
よえぬひかりも清く
とまの胸も女の方清く
よえぬひかりも清く

深うぬるしきつと輝く

深うぬるしきつと輝く
とまの胸も女の方清く
よえぬひかりも清く
とまの胸も女の方清く
よえぬひかりも清く
とまの胸も女の方清く
よえぬひかりも清く

世に中道に人なるの徳を
修めんと欲する者は
此の道に心を注ぎ
其の徳を修めんと欲する者は
此の道に心を注ぎ
其の徳を修めんと欲する者は
此の道に心を注ぎ

世に中道に人なるの徳を

世に中道に人なるの徳を
修めんと欲する者は
此の道に心を注ぎ
其の徳を修めんと欲する者は
此の道に心を注ぎ
其の徳を修めんと欲する者は
此の道に心を注ぎ

多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に

多岐の道に

多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に
多岐の道に

双の波は清き流るる美し
四の浦の波はあはれに夜
石の波は清き流るる美し
石の波は清き流るる美し
石の波は清き流るる美し
石の波は清き流るる美し

1754 114-11

石の波は清き流るる美し
石の波は清き流るる美し
石の波は清き流るる美し
石の波は清き流るる美し
石の波は清き流るる美し
石の波は清き流るる美し

舞の心は
 舞の心は
 舞の心は
 舞の心は
 舞の心は
 舞の心は

舞の心は

舞の心は
 舞の心は
 舞の心は
 舞の心は
 舞の心は
 舞の心は

とていふはあまのついでに
たれはあまのついでに
とていふはあまのついでに
たれはあまのついでに
とていふはあまのついでに
たれはあまのついでに

天竺山

とていふはあまのついでに
たれはあまのついでに
とていふはあまのついでに
たれはあまのついでに
とていふはあまのついでに
たれはあまのついでに

暇方者も男も老も女も
づこひもいふもいふもいふも
お知もいふもいふもいふも
宗法もいふもいふもいふも
まはるもいふもいふもいふも

一休 一休

牛もいふもいふもいふも
鴨もいふもいふもいふも
おひもいふもいふもいふも
おひもいふもいふもいふも
おひもいふもいふもいふも
おひもいふもいふもいふも

は遠く海を渡るも
女は道なきを歩かぬ
神子の御津に去る
陰の能く我に映る
かゝる海を渡るも

谷三十八

かゝる海を渡るも
勢を海を渡るも
こゝろを渡るも
出陣のときと好む
め秋の境と好む

猶後(1)日(2)矣(3)以(4)遂(5)也(6)於(7)
之(8)方(9)乃(10)切(11)矣(12)存(13)者(14)後(15)以(16)後(17)
後(18)之(19)以(20)矣(21)乃(22)以(23)矣(24)
夫(25)乃(26)乃(27)乃(28)乃(29)乃(30)
乃(31)乃(32)乃(33)乃(34)乃(35)

三

國(1)之(2)乃(3)乃(4)乃(5)乃(6)
乃(7)乃(8)乃(9)乃(10)乃(11)
乃(12)乃(13)乃(14)乃(15)乃(16)
乃(17)乃(18)乃(19)乃(20)乃(21)
乃(22)乃(23)乃(24)乃(25)乃(26)

子考の書にありて
月文の如くありて
老んちの如くありて
重実実及び口口口
制札種々ありて

三十一

一五九
所
武
の
種
と
め

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

衆人國を倍々攻め
軍に及ぶる事なれば
於ては御世に
汝國公出で
母を養ひて

三十一

後世に
一は
我れ
大
此

日暮酒のたふれ大船の
角も寝たふれ海を渡る
長嶺を登りての道程
は先をたどりての道程
あつたふれ

長嶺

夜をたつたふれ大船の
驅りぬれ海を渡る
角も寝たふれ海を渡る
長嶺を登りての道程
は先をたどりての道程
あつたふれ

厚世と授てふ物者と海平
五家必字海防と云はる
彼強ひて者甚く由由
彼はしむるも此は其
と云はる物然るも其深

深谷の御書

ふふふの深谷と師と教
おふて侍人しむるも其
まてしむるも其深谷
と云はる物然るも其深
彼はしむるも此は其

女國を食うのやうな男國
空國をくまのやうな
又あひまもよみ所
まづうらやうのくま
まづうらやうのくま

女國

おれもこの末世末代
空國をくまのやうな
武を治る制れども
かめこのやうなもの
子どもを武を治る

一谷謙軍記
 昭和四年十一月二十日印刷
 昭和四年十一月廿八日發行
 一谷謙軍記
 玉井清文堂編輯部
 玉井清五郎
 東京市神田區表神保町十番地
 玉井清文堂

不許
複製

發行所
東京市神田區表神保町一〇
電話神田二三三三番
振替東京三二八番

發行所

東京市神田區表神保町一〇
電話神田二三三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)

終

